

問1

- ・「かりほの庵」＝稲を刈り入れる時期に、田のそばに仮に作った粗末な小屋（仮の番小屋）。
- ・「苦をあらみ」＝（屋根を葺いた）苦の編み目が粗いので。「(名詞)を(形容詞語幹)み」で「～が…ので」と理由を表す。
- ・収穫期の田を守る人の苦勞。夜露に袖を濡らしながら見張りをする、農民への思いやり・わびしさ。

問2 「来にけらし」＝（夏が）来てしまったらしい。「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形、「けらし」は過去推量「けらし（＝けるらし）」で、「～したらしい」と推定する意。

問3 「白妙の」は「富士（の高嶺）」にかかる枕詞。（雪の白さを導く。）

問4 「てふ」は「といふ」が変化（約まって）できた語。意味は「～という」。（「衣ほすてふ」＝衣を干すという。）

問5 「ひとりかも寝む」＝（私は）たった一人で寝るのだろうか。「かも」は疑問・詠嘆、「む」は推量。

問6 「降りつつ」の「つつ」は動作の反復・継続を表し、「（今も）降り続けていることだ」という臨場感と余情を生む。万葉集の「降りける」よりも、時間が止まったような幻想的・繊細な情景となる。

問7

- ・「ふりさけ見れば」＝（遠く）はるかに振り仰いで見ると。
- ・作者の安倍仲麿は遣唐留学生として唐に渡り、長く帰国できずにいた。唐の地で月を見上げ、故郷の奈良・春日にある三笠山に昇っていた月を思い出して詠んだ歌である（帰国を願う望郷の歌）。

問8 「神のまにまに」＝神の御心のままに。（紅葉を幣の代わりに神にお任せする、という意。）

問9 「ちはやぶる」は「神（神代）」にかかる枕詞。

問10 流れる竜田川の水面が、一面に散り浮かんだ紅葉によって、鮮やかな紅（くれない）色に染め抜かれている情景。神代の昔にも聞いたことがないほど不思議で美しい、という驚嘆を込めている。

問11 久しぶりに再会した相手（幼なじみの友人）を、夜半の月が雲に隠れてしまうように、それと見分ける間もなく慌ただしく帰ってしまった、その人をたとえている。儂い再会の名残を月に重ねた表現。

問12 『源氏物語』（ほかに『紫式部日記』も可）。

問13 「いたづらに」＝むなしく・無駄に。

問14 「ながめ」＝「眺め（物思いにふけて眺めること）」と「長雨（ながめ）」の二つの意味の掛詞。

問15 「色に出でにけり」＝（恋しい気持ちが）顔色・表情に出ってしまったよ。「色」は表情・顔色の意。

問16 二句切れ。（「夏来にけらし」で意味が大きく切れる。）

**問17** 序詞（じょことば）。「あしびぎの山鳥の尾のしだり尾の」が、次の「ながながし」を導く序詞となっている。

**問18** 「幣」＝神に祈るときに捧げる供え物。布や紙などを細かく切って捧げるもの（道中安全などを願って手向ける）。

**問19** 隠喩（暗喩）。「紅葉の錦」と、「～のようだ」の語を用いずに紅葉を錦（美しい織物）にたとえている。

**問20** 「花の色」（桜の花の色）と、作者自身の容色（美貌）。長雨で花の色があせるのと、物思いをして過ごすうちに自分の美しさが衰えることとを重ねて嘆いている。

**問21** 人に知られまいと懸命に隠していた恋心が、とうとう表情に出てしまい、「何か物思いをしているのか」と人に尋ねられるほどになってしまった、という秘めた恋のせつなさ・うろたえ。

**問22** ①・②。①は天智天皇、②は持統天皇の歌。いずれも天皇（位にあった人物）が作者である。（⑤の安倍仲麿は遣唐留学生であり天皇ではない。⑥の菅家＝菅原道真、⑦の在原業平、⑩の平兼盛なども天皇ではない。）

**問23** しろたへの（白妙の）。枕詞は「の」までを含めた五音の「しろたへの」の形で答える。